



後二年で還暦を迎える

私は、公集小学校に本年度着任した。着任式で子どもたちが歌う校歌を聞きながら、自然と口ずさんでいた。そう、公集小学校は、私の母校である。五十数年前お世話になった学校に戻ってきたのである。

校門近くの交差点で毎朝交通指導をし、子どもたちを迎えている。新一年生は、大きなカバンを背負い、まるでカバンが歩いていては、新学期の見慣れた光景である。交通指導をしながら子どもたちに声をかける。元氣よく、にこやかにあいさつの声がこだまする。

「校長先生、おはようございます。」と返してくれる子もいる。校長として四校赴任し、どの学校でも毎朝交通指導をしてきた。子どもたちを毎朝学校に迎える気持ちは同じであるが、子どもたちの登校する姿を見ていると、昔の私と重なって、不思議な感覚にとらわれる。(自分が生まれ育った学校だからであろうか。)朝渋っている一年生が、母親や父親に付き添われて登校して来る。泣き渋っている子を見ると、私が一年生の時、忘れ物を家に取りに帰り、遅れたことでぐずって学校に行けなかった自分の姿とダブってしまう。入学したての頃は、何かと不安である。学校生活に慣れ、新しい友達ができ、安心して学校に通えるようになるまでは、しばらく時間

がかかる。

学年が上がるにつれ、友達と楽しく会話しながら登校して来る。活発に活動できるようにになると同時に羽目を外すことも多くなる。服装が乱れたり、ルールを守らなかつたりで注意を受けることが多くなる。そんな時、私の長所を伸ばしてくれる先生に出会った。今、私が教師であるのは、この先生との出会いがあったからだ。

子どもたちは、学校生活を通して、友達、地域、教師など様々な人と出会う。人と人のかかわりの中で、子どもたちは、大きく成長していく。

今、公集小学校の校歌を歌っている子どもたちが、十年後、二十年後どのような大人になっていくのだろうか。人生の礎をこの公集小学校で築いていく子どもたちにとって、自分に自信がもて、自己有用感のもてる学校にしていかなければならないと考える。家庭・地域・教職員が連携し合っ

て、子どもたちの成長を支えていける公集小学校にしていきたいと意を新たにしている。

母校に戻って

下松市立公集小学校校長 島田 和 昌

飛 耳 長 目

志を立てて

萩市立育英小学校校長 平 野 正 和



今年度から新しく山口

県小学校長会の一員として、萩市立育英小学校へ着任することになった。仲間入りと同時に執筆をお引き受けすることになり、松下村塾におかれていた松陰先生の「飛耳長目録」を思い出し、光栄に感じている。

赴任した育英小学

校は、萩市須佐にある児童数七十五名の学校である。ホルンフェルスや男命イカなど観光資源の豊富な町である。平成二十五年の豪雨で大きな災害に見舞われた。徐々に復興しつつあるが、まだまだ町のいたるところに爪痕が残っている。災害の折には、萩市内だけでなく県内・県外から多くのボランティアの方に来ていただき本当に感謝している。小学校は

すっかり前の姿を取り戻し、以前のよう

「益田館」をお借りして「幕末育英塾」という体験教室を開き、当時の人々の志に触れる経験をさせてもらっている。この「育英館」は、幕末当時の領主である益田親施氏が松陰先生に師事したこともあり、松下村塾と塾生の交流も行っていった。後の日本を動かしている人々も須佐の地で学んだことがあると思うと感慨もひとしおである。松下村塾は、数多くの人材を輩出したことで有名だが、現在の学校は人材育成が喫緊の課題であり、自分自身の課題ともなっている。今、人材育成の取組の参考にさせてもらっているのは、「アドラーに学ぶ部下育成の心理学」という本である。この本は「ほめない」「叱らない」「教えない」ことで、自ら動く部下を育成することを基本としている。「ほめない」「勇気づける」「叱らない」で「気づかせる」「教えない」で「自ら学ばせる」。この育成方法は、縦の関係でなく、横の関係が基本である。「自ら学ばせる」時には「あなたはこうしたい？」という質問を相手に返す。この質問が現在放送中の「花燃ゆ」の前半で、松陰先生が語りかける「志は何ですか？」という言葉に通じるものがある。松下村塾での松陰先生と塾生の関係もお互いに学び合う同士であるという横の関係が基本にある。

育英小学校の校名の由来は、毛利家

「志を立ててもって万事の源となす」校長としての志はまだまだ定まらないが、常に学ぶ姿勢はもち続けたいと考えている。